

Terima kasih

インドネシア語で
ありがとう

前ジャカルタ日本人学校校長
現大空町立東藻琴中学校長
岩本 謙一郎

1. はじめに

1997年から3年間シンガポール日本人学校クレメンティ校で一般教員として勤務した経験があったが、管理職（校長）として赴任するには非常に不安であった。

11月末にインドネシアジャカルタ日本人学校に決まり、早速場所を確認すると何とシンガポールのお隣の国。気候もほとんど同じで住むことには不安は感じていなかった。

スカルノハッタ国際空港に降り立ち、シンガポールとは全く違う雰囲気を感じて、初めてやっていけるだろうかという不安感に襲われた。

しかし、ここで生活する子どもたちのために精一杯頑張らなくてはと思い、3年間を過ごしてきた。

教員集団にも恵まれ、素晴らしい児童・生徒、協力的な保護者の皆様には本当に感謝している。



2. インドネシアについて

インドネシア共和国（インドネシアきょうわこく）、通称インドネシアは、東南アジア南部に位置する共和制国家である。総面積が日本の約5倍強であり、島々は東西5、100km、南北1、900kmにわたって点在し、その数約17、000で世界最大の島嶼国家である。環太平洋火山帯に属し、現在も噴煙を上げている火山も多い。

総人口は約2億4000万人を超える世界第4位の規模であるが、その大多数はイスラム教徒であり、世界最大のイスラム人口国としても知られる。

島々によって構成されている国家であるため、その広大な領域に対して陸上の国境線で面しているのは、東ティモールのティモール島、マレーシアのカリマンタン島（ボルネオ島）、パプアニューギニアのニューギニア島の3国だけである。海を隔てて近接している国は、パラオ、インド（アンダマン・ニコバル諸島）、フィリピン、シンガポール、オーストラリアである。

言語は、マレー語を母体としたインドネシア語が公用語で、地方語はジャワ語、スダ語、バリ語等約250あると言われる。

宗教については、憲法で「国民の信仰の自由並びに宗教的義務遂行の自由の保障」を規定しているが、国民の90%はムスリム（イスラム教徒）であり、インドネシア社会におけるイスラムの中心性は顕著である。日本人学校に働く現地職員の多くもムスリムであり、お祈りの時間は大切である。特に断食月の期間は学校行事等に影響が出ないように配慮する必要がある。



日本大使館周辺



普通の光景



バジャイ

(太陰暦を使用するのでプアサはずれていく)

しかし、イスラム教は国教ではなく、政府はキリスト教プロテスタント、同カトリック、仏教、ヒンドゥー教を国家公認の宗教と認め、憲法上平等に扱っている。公認以外の宗教や無神論は許されない。従って、国民は公認宗教のいずれかを選び、住民登録等の際に申告することになっている。

首都はジャカルタであり、人口1、200万人の大都会である。政治・経済・文化・教育の中心地として活気が漲っている。街にはとにかく人と車が多く、交通渋滞は想像を絶する。市内は近代的な高層ビルが林立し、広い道路をたくさんの車が走っているが、一步裏通りに入ると貧しい人々の家々が並び、裸足で歩く人も見かける等、貧富の差が激しい。

《インドネシア国旗》

Merah (赤) Putih (白)

赤は勇気と情熱を、白は真実と聖なる心をあらわす。



インドネシアの国章は「ガルダ・パンチャシラ」(Garuda Pancasila) と呼ばれる。これは、胸に盾を抱え、足で巻物を持った金色の神鳥ガルダである。盾(シールド)にある5つのエンブレムは、インドネシアの建国5原則であるパンチャシラを表す。

ジャワ語:Bhinneka Tunggal Ika

「多様性の中の統一」

3. ジャカルタ日本人学校の様子



校舎正面

(1) 学校の概要

ジャカルタ日本人学校は首都ジャカルタ郊外の Banten州Tangerang 県のBintaro Jayaにある。1996年4月に手狭になったPasar Minggu校舎からこの地に移転した。

当時の児童生徒数は1、100名を超えていたが、1998年5月のジャカルタ暴動により休校となり、再開後はその数が半減した。その後、徐々に増加していき、私が赴任した2011年4月の児童生徒数は801名であった。幼稚部も同じ敷地内にある。在任した3年間で児童生徒数が約350名増え、現在は幼稚園児を含めると約1、400名を超える在籍数となった。(単一校舎では世界4位)

敷地面積は79、192㎡で3階建て校舎が3棟、小学部中学部それぞれにグラウンド、体育館、プール、コンピュータ室があり、



入学式



水泳記録会

全教室や中学部体育館に冷房が完備されている。他の日本人学校と同様に日本の学習指導要領に則った教育を実施するとともに、小学校1年生から「英会話学習」の実施や、総合的な学習の時間にはインドネシア理解学習やインドネシア語の学習を実施している。

また、体育祭やJJSフェスティバル（文化祭）、様々な体験活動や社会科見学、遠足、修学旅行など日本国内の学校と同様たくさんの学校行事が組まれている。

児童生徒はスクールバス（約60台）やアパートメントの所有バス、自家用車等で通学している。ジャカルタの酷い交通渋滞を避けるために、朝は午前7時20分までに登校する。中には1時間から2時間もかけて通学する子どもがおり、朝5時に起床し、6時に家を出る児童生徒もいる。このような子どもたちのために『中間食』があり、持参するか校内の売店で買ったパンを食べる。

給食はないので、弁当を持参し、水道水が飲めないので水筒を持参する。

下校のバス発車は安全対策上多少の渋滞に巻き込まれても明るいうちに帰宅が可能な午後2時50分を通常とし、これを厳守している。

我々教員も日本に比べ出勤時間が早い。多くの教員は朝6時半までには出勤している。私も6時にアパートを出て6時半には学校に到着するが、ほとんどの教員が出勤している。校長・教頭（2人）・教務主任（2人）の打ち合わせは7時から行い、職員朝会は7時20分から始まる。

（2）学校行事

体育祭、JJSフェスティバル（文化祭）、遠足、宿泊学習、修学旅行など、国内同様たくさんの学校行事がある。すべての行事は安全第一で行われ、小学部の修学旅行には警備員も同行する。

中でも小学部と中学部が合同で行う体育祭は、5色に分かれた（1年目は3色、2年目は4色であった）縦割りで行われ、応援合戦もあり、児童・生徒はもちろんのこと、来賓や保護者の方々も熱狂する。朝の場所取り後（6時）は保護者がビールを飲む姿も多く見られる。また、日本食スーパーが出店し、ビールや焼き鳥、かき氷等を販売している。



授業参観



校長室へインタビュー



校内にある喫茶店



中学部 バリ修学旅行



Jフェス最終日



体育祭後 各団長たち



書き初め大会



体育祭 入場行進

JJSフェスティバルとは、小学部が学習発表会、中学部が合唱コンクールをメインに行う行事である。また、小中交流も行われ、小学部高学年、中学部の生徒が模擬店を出し、小学生を楽しませることも行っている。また、御輿の練り歩きも行われ、雰囲気が高潮に達したところでフィナーレを迎える。

日イスクールという中学生が参加する日本・インドネシア友好親善スクールは20年以上の伝統を持ち、インドネシアの現地校生徒と食を共にする楽しい行事である。その他部活動の親善試合、ヘリテージ(インドネシア理解学習)など、楽しい行事がたくさんある。

また、日本から様々な分野の方が学校を訪問してくれる。

4. 特色ある教育

1年に一度、東アジア・大洋州地区日本人学校校長研究協議会が開催される。2年目には本校が当番校であった。そこで、中学部が実践してきた取組について教務主任がまとめてくれたので紹介したい。

☆中学部の実践から

ともすれば、「海外にある学校だから自然とグローバルな視点が身につくだろう」と簡単に考えがちである。しかし、ジャカルタ日本人学校では、現在文部科学省からも重要と言われている「キャリア教育」の視点で様々な教育活動を行い、その中に在外教育施設ならではのエッセンスを取り入れている。

子ども達のキャリア形成を育む活動の中に、国際感覚を育む活動を取り入れることで、グローバルな視点で自分の将来を思い描くことのできる児童生徒を育成することができると思ったからである。

ジャカルタ日本人学校「キャリア教育指導目標」

個性を生かし、生き抜く力を養い、自己実現を図れるようにする。
国際的な広い視野を持つ生徒を育てる。

目標の文面にも「国際的な広い視野」という文言が含まれており、我々教職員も意識をしながら日々の教育活動を展開してきた。

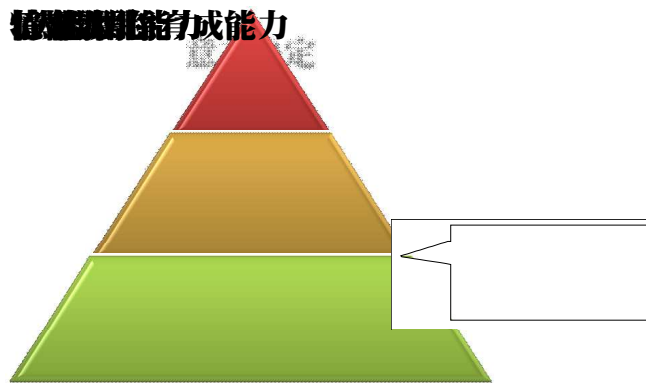
右にあるのがキャリア教育の構想図である。

キャリア形成に必要とされる四能力が積み上がって行くイメージである。そこで、「人間関係育成能力」を育むために、「コミュニケーション能力」「コラボレーション能力」を高める活動を行っている。

また、「情報活用能力」「将来設計能力」を育むために、「職業観・国際感覚」を高める活動を行っている。

最終的にこの三能力を高める事で、「意志 決定能力」を育む事に繋がり、結果「グローバルな視点を持った 児童生徒」の育成に繋がると考えたからである。

まずは、「人間関係能力」を高めるための活動についてである。



「コミュニケーション能力」については日常の学校生活での取り組みを、「コラボレーション能力」については学校行事での取り組みを中心に紹介していく。また、「情報活用能力」「将来設計能力」を高めるための活動については「職業観」「国際感覚」を育む取り組みについて紹介する。

①「コミュニケーション能力」を育成する取り組み

ア. 生徒会活動の充実

★公的な場で、自分の意見を発表できる力を

★学年を問わず、議論が成立できる集団に

この2つの事を念頭に取り組んでいる。

生徒総会では、役割や立場に合わせた発言や発表を意識させている。また、生徒会本部役員のランチミーティングを行っている。放課後が事実上ない日本人本校において、ランチの時間は学年を超えた話し合い活動の有効な時間である。

幼稚部での読み聞かせ

イ. 「学部交流活動」の充実

★学年・男女の壁を越えて、学部の一体感を高める

★生徒自身による運営で、企画力・計画性を高める

この二つの事を念頭に取り組んでいる。

交流委員会主催の「お弁当集会」では教職員も輪の中に入り、交流を図っている。また、この他にも生徒会本部主催の「新入生歓迎会」等がある。

このように、生徒自身の手による企画・運営で、学部・男女を超えた交流活動を進めている。

公開型執行部会

ウ. 「プレゼンテーション活動」の充実

総合的な学習の時間を中心に、計画的にプレゼンスキルを高めている。また、コンピューター活用のスキルを高めることに主眼を置くのではなく、他の手法も含めて「情報を伝える」力を育てている。「職場体験事後報告会」では、パワーポイントを活用する生徒が多いが、紙芝居やロールプレイで発表する生徒も見られる。

現地校交流での発表では、現地校の生徒とデータのやりとりをしながら一つのプレゼンを創り上げ、体育館で保護者を招いて発表会を行う。言葉の違う人たちとのコミュニケーション活動は、在外教育施設ならではある。

大使館訪問

②「コラボレーション能力」を高める取り組み

ア. 体育祭

小中一貫校という特色を活かし、9学年縦割りで実施している。

★全児童生徒が関わり、共に創り上げる喜びを実感する

★生徒の手による企画・計画・運営で、先を見通す段

中学部女子 ダンス

取り力を身に付ける

体育祭では、この2つを念頭に取り組んでいる。

体育祭では、中学部全員による、組み体操（男子）やダンス（女子）が行われる。練習の過程で、教え合いや話し合いの場面を設け、最高の演技の完成を目指す。また、本校の体育祭の目玉と言ってもいい、一団200名を超える縦割り団による応援合戦も行われる。中3の応援リーダーを中心に、演舞企画から練習計画の立案、団着や団Tシャツのデザインまで、生徒自身の手で創り上げる。まさに小中一貫校の特色を最大限に活かした取り組みと言える。

中学部男子 組体操

イ. 「JJSフェスティバル」（いわゆる文化祭）

児童生徒実行委員が中心となり、小学部、中学部が協働して連帯感を高める行事である。また、日本人社会の絆を深める事にも貢献している。中学部が出店形式で小学部を招待する、「小中交流企画」があり、小学生の視点に立って、「人を喜ばせよう」とする気持ちが形となって表れる。

最終日のフィナーレでは、最後まで児童生徒が主役となり、会場の連帯感が最高潮に達する瞬間である。体育祭同様、小中一貫校だからこそできる行事である。

体育祭 応援合戦

③職業観の育成

ア. 職業学習

1学年では、働くことを身近に感じるために、「職業調べ」を行っている。身近な人の職業に関する内容をインタビューすることで、職種による仕事内容の違いやそこに至までの経緯を知ること、より職業について身近に感じることができる。

2学年では、職場訪問を行っている。ジャカルタにある多くの日系企業等の協力を得て、様々な職種に触れることができる又とない機会である。事前学習では、インターネットを活用して、訪問先の情報をしっかりと理解してから、実際にインタビューしたり体験をしたりしている。

インドネシア国会訪問

3学年では、「インドネシア国会への訪問」と「在インドネシア大使館への訪問」を行っている。

国会や大使館の仕事について理解を深める事はもちろん、キャリア教育の視点からも色々な話を聞くことができ、将来について深く考えるきっかけとなる。

現地校との交流

また、小学部高学年との共同企画として、「職業講話」を毎年実施している。「海外で活躍する人」を招いての講演会で、様々な業種、立場の方からお話を聞けることは、これから国際社会で活躍しようとする子ども達にとっても貴重な経験である。

④国際感覚の育成

ア. 現地校との交流

高校受験面接練習

1 学年では、音楽を通してのコミュニケーション活動を行っている。昨年度はリコーダーを現地の生徒に教えたり、お互いが合唱や合奏を披露し合ったりした。

2 学年では、日本文化の一つとして「書道」を教える、という活動を行った。そのためには、まずは自分たちが日本文化のよさを知った上で、相手に伝えるということが大切になってくる。

3 学年では、現地校へ出向いて日本語教室を開いた。事前に、現地校の生徒の興味関心のあること（音楽やアニメなど）をインタビューして、それを教材として指導案を考えた。当日は、日本語教室以外に、現地校で準備したレクリエーションを行った。

最後に、中学部で行っている、「日本・インドネシア友好親善スクール」である。これは、様々な交流を通して、国際理解を深める事を目的としている。お互いの学校から実行委員を選出し、合同会議をくり返して企画を進めていく。当日は、一日時間を共有することで、国の壁を越えた友情が育まれる。

日伊友好親善スクール

5. インドネシアでの生活

(1) 断食月（ラマダン インドネシアではプアサ）

インドネシアはイスラムなので太陰暦を使用している。それによって、断食月は毎年変わる。そのため、日本人学校も長期休業の日程を変えなくてはならない。2015年度はレバラン（イスラムの正月）があり、その後授業を実施し、また夏休みに入ることになる。（レバランの時は祝日になる）

また、レバラン明けにはスンバコ（Sembilan barang pokok スンビラン バラン ポコッ 9種類の生活必需品の意味。）を贈る習慣がある。日本のお歳暮のようなものである。日本人学校でも周辺住民にスンバコを贈る。（約1、000袋にPTAのボランティアの方々が袋詰めをする）

世界一の渋滞

レバランの時は、運転手さん、メイドさんも休みをとる。（約10日間ほど）

(2) お祈り

イスラム教の信者は毎日5度のお祈りをする。朝4時くらいからお祈りをするために集まって下さいという音楽が流れる。（朝はそれで目が覚める）2回目は12時から。3回目は3時頃、4回目は夕方6時頃から行われる。その後が就寝前のようなのである。運転手（ソピル）さんはお祈りの時間には使わないようにしている。（約20分ほどだが、金曜の12時は1時間ほどである）

歩道橋は危険

(3) カリヤワンさん

ジャカルタ日本人学校ではカリヤワンさんと呼ばれる人が約40人ほど働いている。仕事は、印刷、掃除、物品の制作、電気関係、行事の準備（椅子や机を並べる、ライン引き、テントを立てる）等全てに渡って行ってくれる。教員はセッティング依頼書（いつ、どこを、どのようにしてほしいかを書く）を事務室に提出するとセッティングしてくれる。

DAISOもあります

この他にも公用車の運転手さんも10人ほどいる。

(4) 治安は？ 普段の足は？ 物価は？

昔に比べると治安は良くなったと言われるが、日本人は基本的に外を歩くことはあまりない。(昔は、教員が外を歩いていると保護者から学校にクレームがあったそうだ)

特に、タクシーは決まった会社のタクシーに乗る。歩道橋は渡らないなど心配なこともある。携帯電話(スマートフォン)は狙われやすく、すられることもよくある。

日本食スーパー

基本的にインドネシアは車社会である。我々も赴任する時に新車を購入した。道路は車とバイクで溢れている。とても自分で運転することはできない。(日本人学校では運転してはいけないことにしている)そこで、それぞれが運転手(ソピル)さんを雇う。給料は朝6時から午後2時までがベースとなる時給。それ以降はオーバータイム料金となる。ソピルノートに毎日の給料金額を書き込み、週末に支払う。また、月末に基本給を支払う。(月給は約32,000円ほどである)毎日、学校へは高速道路を利用して通勤していた。片道(約30分)110円ほどである。ジャカルタは世界で一番渋滞が激しいと言われている。道路の作りが日本とは違って、右折できないところがたくさんあり、一度反対方向に走って、Uターンして戻ってくるといふ不思議な作りになっている。(これも渋滞の要因である)会議で出かける時など、日本なら30分ほどで到着できる所も1時間半ほどかかり、ストレスとなる。インフラ整備が遅れているので、雨が降ると渋滞はもっと激しくなる。また、洪水になることもしばしばである。

物価は日本に比べると安い。マグロやサーモンの刺身は日本より安く美味である。日本食のランチもとっても美味しく安く食べられる。ビールもインドネシアのビンタンビールがあるが、日本酒や焼酎などは非常に高く滅多に飲めない。(梅酒が一番高い)

しかし、めざましい経済成長を遂げているインドネシアでは日本企業が次々に進出し、日本人がどんどん増えてきている。赴任した当初に比べると物価はどんどん上がっている。日本人学校の教員が住むアパートも家賃が急激に上がり、今まで住んでいたアパートには住めなくなっている。

ガソリンは低所得者のために(バイクが多いので)国から補助金が出ているので日本に比べると非常に安いので驚いた。赴任当初は1リットル日本円で45円であった。途中で65円に値上げした。

6. 最後に

以上、色々な取り組みを行っているが、このようにキャリア形成を進めていく上で、コミュニケーション能力を育む事で、最終的にグローバルな視点を持った児童生徒を育てることに繋がると考える。

在外教育施設だからできないことは確かにある。それを補って、なおかつ在外教育施設だからできることを、教職員の熱意と創意工夫で積極的に進めていくことが、日本人学校としての使命ではあると考える。

離任式

このように平成23年度から3年間の文部科学省在外派遣期間において、本校の職員、現地の日本人会の方々、現地校の先生方、多くのインドネシアの方々から多くのことを学ばせていただいた。日本国内とは大きく異なる教育環境にも関わらず、様々な活動に積極的に挑戦する子どもたちから刺激を受け、在外教育施設の重要性を改めて肌で感じ取ることができた。

3年目には大相撲ジャカルタ巡業が開催され、日本相撲協会から和太鼓、スポンサーのトヨタ様から化粧まわし、そして、現地の大相撲支援委員会からは屋根付きの土俵がプレゼントされたことは本当に大きな思い出となった。

今回の在外教育施設派遣にあたり、派遣して下さった北海道教育委員会、常に温かいご指導とご支援を下さった在インドネシア日本国大使館、文部科学省国際教育課、外務省、海外子女教育振興財団、ジャカルタ日本人会、そして、大変お世話になったジャカルタ日本人学校維持会など多くの方々にご心より感謝申し上げます。